

---

# 九十九里少年探偵団シリーズ「結成！ 少年探偵団」

ともゆき

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

九十九里少年探偵団シリーズ「結成！ 少年探偵団」

### 【Nコード】

N9192A

### 【作者名】

ともゆき

### 【あらすじ】

九十九里学院小学校に通う「九十九里少年探偵団」と呼ばれる6人の男女の活躍を描くミステリー。今回はその結成までの話です。

## プロローグ

春、4月。

海からのさわやかな風が吹きつける千葉県茂原市にある九十九里学院小学校。

今日は始業式と言うこともあつてか、登校してくる児童達もこれから新学年が始まる、と言う期待と不安が入り混じった顔をしていた。

そんな学校の校門の前に待ち合わせをしているのだろうか、一人の少年が立っていた。

それから程なくして、一人の少年が校門の前にやってきた。

「よ、ノブ、おはよう」

校門に立っていた少年　　佐々木圭亮が挨拶をする。

「おはよう、圭亮」

ノブと呼ばれた少年　　鶴田信幸が挨拶を返す。

「やれやれ、オレ達も今日から5年生かよ」

圭亮が言つと信幸が、

「そうばやくなよ。3年生に逆戻りしたら大変だろう。…それより

唯ちゃんたちは？」

「…もう中に入ってるぜ」

「そうか、じゃ行こうか」

そついうと信幸と圭亮のふたりは校門に入つていった。

\*

玄関前には大勢の児童達が集まっていた。

おそらくクラス替えで自分がどのクラスに振り分けられたかを確認かめているのだろう。

その中にいた肩までかかっている髪の毛の少女　　早乙女唯が信幸と圭亮に気がつくつと、

「あ、鶴田君、佐々木君。おはよう」

「おはよう、唯ちゃん」

「…さて、オレ達はどのクラスかな？」

「どこだと思う？」

唯が言う。圭亮は張り出されている掲示板から自分の名前を探した。…と、

「…なんだよ、ノブ。またお前と一緒にかよ！」

「あんただけじゃなくてあたしや唯、みことも一緒よ」

圭亮の隣に立っていた髪の毛を両方でお下げにまとめた少女

森沢涼子が言う。

「…つてことはオレたち5人、また同じクラスかよ。ハハハ、これで5年連続だな」

信幸が言う。

「…幼稚園も一緒だったんだから7年でしょ？」

涼子が言う。

そう、なぜかわからないが、この5人は不思議と幼稚園のころからずっと同じクラスの仲間だったのだ。そのためか今では校内でも

「5人組」としてけっこう話題になっているのだった。

「ハハハ、りょーこちゃんの言う通りかもしれないな」

「…でも、7年も一緒のクラスなんて、大人になったら自慢できるかもしれないですよ」

みこ 藤堂みこが言う。

「かも知れないな。…ま、とにかく行こうか。担任の先生が誰かも気になるしさ」

信幸の言葉に5人は教室に向かった。

\*

教室に入ると黒板に座席表が貼り付けてあり、既に指定された机に座っている生徒達もいた。

そしてチャイムが鳴ってそれぞれの席に着いて間もなくだった。

一人の教師が教室に入ってきた。

意外、といつては失礼だが25〜6歳の若い男性教師だった。  
その教師は教壇に立つと、

「…今日から君達の担任を勤める事になった須崎雅彦だ。先生もまだ教師になって日が浅くて、先生にとつては君達のクラスが初めての担任となった。先生もまだわからないことだらけだけど、君達と一緒に勉強して行きたいと思っっているのでよろしく頼む」  
そういうとその須崎教師は生徒達に一例をした。

「…さて、自己紹介はこのくらいにして、早速だが、この学校に転校生がやってきて、今日からこのクラスと一緒に勉強をすることになった仲間がいるので君達に紹介しよう。…入って来たまえ」

そう言う一人の少年が入ってきた。

その瞬間、女子の間から驚きともなんともつかないどよめきが起こった。

そう、その少年は絵にかいたような美少年で、どこことなく上品な雰囲気を感じていたのだ。

「それでは、自己紹介を頼む」

そして須崎がその少年に自己紹介をするように促すと、その少年は、

「Enchanter . Je m'appelle Kazumi  
Hara .」

その言葉に思わず全員が目丸くした。と、

「…あ、今のはフランス語で『初めまして。私の名前は原和美です』  
と言う意味なんですよ」

その少年が日本語で言った。

いきなりフランス語で挨拶をしたと言う驚きと、日本語が話せるとわかって全員が複雑な表情をする。

「…なんでも、彼は何でもこの3月までお父さんの仕事の都合でパリに住んでいて、その日本人学校に通っていたそうだ。聞いた話だと向こうで生まれたらしい」

「パリ、ってフランスの？」

「…おい、それ以外のどこにパリがある、ってんだ？」

須崎の言葉に思わず笑い声が起こる。

「…まあ、とにかく、そういったことでまだ日本の生活に慣れていないところがあるそうだが、みんなもそういったところはちゃんと教えてやってくれよ」

「…とにかく皆さん、よろしくお願いします」

そして、原和美、と名乗った少年は全員の前で頭を下げた。

「…じゃ、そろそろ始業式が始まるから行くか」

そして、彼らにとっての新しい生活が始まったのである。

（事件編に続く）

## 事件編

新学年が始まって1週間ほどが過ぎた。

転校してきた和美はあつという間にクラスの女子達の間で人気となり、毎日のように彼に取り巻いている女子の姿を見かけるようになった。

中には彼にフランス語を教わっている女子もいる、と言う。

そんなある日の学校の帰り道。

信幸と圭亮の二人が並んで歩いている。

「それにしても、あの和美、つての凄い人気のようにだな」

圭亮が言う。

「そのようだな」

「…全く、あんなのどこがいいんだろつかね？」

「そうだよな。単にフランスで生まれてるだけじゃねえか、っつーのによ」

「ホントだよな」

そんな話を話しながら歩いていると、不意に信幸が立ち止まった。

「…どうした、ノブ？」

「…あれ？ 前歩いているの、アイツじゃねえか？」

「…みたいだな」

そう、信幸たちから十数メートル離れて和美が歩いていたのだっ  
た。

「…アイツ、この辺に住んでるのか？」

「そのようだな」

そんな話を話していると、和美はあるマンションに入っていた。

「あそこ、最近出来たマンションだよな」

「ああ。…あいつ、あのマンションに住んでいるのか…」

「まさか、ノブの家の近所だったとはな…」

そう、信幸も圭亮も気づいていなかったのだから、この近所に信幸が住んでいる家があるのだった。

「…この辺もだいたい変わったからな。前と比べるとマンションや一戸建ても増えてきているし…」

「…そういえば、ノブ。話変わるけど…」

「何だ？」

「最近、マンション狙いの空き巣がこのへんに出没してる、って知ってるか？」

「ああ、その話なら聞いたよ。何でも被害総額も相当のものらしいな」

「このへんのマンションは高いからな。それなりの金持ってるやつが入ると思ってるのかね？」

「だろうな。アイツだって 和美だって親父がパリの支店のお偉いさんだったんだろ？ それでこっちの支店の支店長に任命されて戻ってきたらしいからな」

「ふーん…。どうりであんなマンションに住めるわけだ」

「…かもな。じゃあな」

「じゃあな」

そして信幸と圭亮は別れた。

\*

それから2、3日過ぎたある日の早朝。

けたたましいサイレンの音を立ててパトカーが通り過ぎていった。

その音に目を醒ます信幸。

「…っせえな。なんだよ、朝っぱらから」

信幸はぶつくさ言いながら部屋のカーテンを開けた。

それから程なくもっ一台のパトカーが通り過ぎて行った。

それから程なく、

「ノブ、起きてるか！」

玄関から圭亮の声が聞こえてきた。

「どうした、圭亮？」

ベランダに出て信幸が聞く。

「…なんでもこの近くのマンションに空き巣が入ったらしいぞ！」

「なんだって？」

\*

そして信幸と圭亮は現場近くまで走っていった。

現場には既に大勢の野次馬が集まっていた。

「…で、被害はどうなってるんだ？」

「いや、オレもよくわからないんだけど、なんでも数件の家が荒らされたらしいんだ」

「…しかし一体誰が…」

「…このマンションはまだ入居者が少ないからね。警備の面で甘い部分もあったんじゃないかな」

いきなりふたりの傍らで声がした。「？」とその方向を振り向くふたり。

「…おまえ！」

そう、いつの間にか和美が二人の傍らに立っていた。

「…それより、おまえの家は大丈夫だったんかよ？」

「ボクの所は大丈夫でしたよ。こういう事には慣れてますから」「慣れてる？」

「…ええ、パリにいたときは二重三重に鍵を掛けてましたから。日本と違って二重三重に鍵を掛けないのは泥棒に入ってください、と言ってるようなものですからね」

結局、その後警察が捜査に入る、と言うことと自分達がまだ朝食もとっていないことに気がついた信幸たちは自分の家に戻ることにした。

\*

翌日、九十九里学院小学校。信幸たち5人と和美を加えた6人が

教室に残って話をしていた。

「…そう、原くんも大変だったわね」

唯が言う。と涼子が、

「それにしても、最近多くない？」

「…そういえばそうですね。この半月で3件も起こってますからねえ」

みこが言う。

「…幸い、ボクの住んでいるところは何ともなかったんだけど、何件かで被害に遭ったところがあって…。被害総額も相当だったらしいですね。ボクの近くに住んでいる人も1件やられましたよ」

「そう…」

「…でもよお、マンションには普通、セキュリティシステム、ってもんがあるだろうが。ましてや、おまえが 和美が住んでいるマンションは最近出来たんだからそういうのあって当たりまえだよ」

「…そうなんですけど、その事件が起きたときはどういっわけだか、そのセキュリティが切れていたらしいんですよ」

「切れてた？」

思わず素っ頓狂な声を上げる信幸。

「それじゃ計画的な犯行じゃないか？」

圭亮も言う。

「…そういえば…」

「どうしたの、唯？」

涼子が聞くと、

「今思い出したんだけど、その被害に遭ったマンション、ってのはどれもこれもその、セキュリティシステムが切れていたらしいわよ」

「なんだって？」

「まずまず計画的な犯行くさいな…」

「…ということとは？」

「ああ。あくまでもオレの勝手な考えだけど、おそらく、最近起こっているマンション泥棒は同一人物の仕業だろうな」

「でも、そうだとしてもオレ達じゃどうしようもないだろう？」

「…まあ、そういわれりゃそうなんだよな…」

そういうと信幸は黙り込んでしまった。

「でも何か手がかりとか掴めないかな？」

唯が言う。

「手がかり？」

「あたしもよくわからないけど、その狙われているマンション、って言うのはそれだけ狙われる理由ってのがあると思うわ。そこから何か、その、犯人の手がかりみたいなのが見つからないかな、って思っ…」

「…うん。狙われているのが茂原市内のマンション、って言うのは共通点にはならないねえ。なんか他に共通点があるのかしら」

涼子が言う。と

「…じゃあ、調べてみるか」

「調べてみる？」

\*

そしてそれから数十分後。

「ここがその、原くんが住んでいるマンションね」

そう、和美の家族が住んでいるマンションに信幸たち6人がいたのだった。

「…それにしても、どうやってセキュリティシステムを切ることなんて出来るんだろうな、ノブ」

圭亮が話しかけるが、信幸はじっとある一点を見つめているままだった。

「…どうした、ノブ？」

「あ、いや、なんでもない。…それよりさ、今からその、空き巣が入った、っていうマンション、見に行ってみないか？」

「え？」

「だって、その被害に遭ったマンション、ってこの近くだろ？ そんなに遠くないし、何以下共通点が見つかるかもしれないじゃない

か、な」  
「…わかったよ、お前も前からそうだった探偵ごっこが好きだったからな」

あるマンションの前に来た時だった。

「…あれ？」

信幸が何かに気がついたようだった。

「どうした、ノブ？」

圭亮が聞く。

「見ろよ」

そう言つと信幸は玄関のある一点を指差した。

彼らがよくコマーシャルなどで見かけるセキュリティシステムの会社名が書かれたシールが貼つてある。

「…アレがどうかしたのか？」

「大抵そういうセキュリティシステムを導入すると、ああいうシールを目立つ場所に貼つていくだろ？」

「それがどうかしたのか？」

「…いや、もし、オレの考えが正しいとなると…、もしかしたら、だな」

\*

そして何軒か回り、6人は公園で一休み、と言うことになった。

「…で、ノブ。おまえがさっき言っていた『もしかしたら』ってなんだよ？」

圭亮が信幸に聞いた。

「ああ、それか…。大したことじゃないかもしれないけど、和美のマンションもそうだったけど、被害にあったマンション、つてのがセキュリティシステムの会社が一緒だったんだよな」

「…それがどうかしたの？」

唯が聞くと、

「いや、ひよっとしたら、犯人と言うのはそのセキュリティシステ

ムに詳しいんじゃないか、と思ってね」

「…詳しい、って…」

「もしかしたら、関係者とかそういった一人なのかもしれないな」

「…そうか！ 関係者だったらそういったシステムの扱い方にも慣れてるもんな」

「…ただ、ここでもう終わりだ。これ以上はオレたちも調べようがないよ」

信幸がそう言うと6人は黙り込んでしまった。

「…だとしたら、張ってみるか？」

圭亮が言うと信幸が、

「張る、っておまえ…」

「でもそれ以外に方法がないんじゃないのか？ 幸い、オレン家の近くのマンションでまだ被害に遭ってないところがあるしな」

\*

しかしそれから数日はこれといった事件は発生していなかった。と言うのも、さすがに事態を重く見たか、警察が捜査を始めた事もあってか空き巣も全く動かなかったようだ。

ただし、その数日はあるいみ信幸たちにとっては事件を調べる時間が出来た、という事で幸運だったかもしれない。

その間の調査は彼らの考えを裏づけするものだった。

狙われたマンションはやはり信幸の指摘したとおり、同じセキュリティシステムを使っていること（というか信幸たちが住んでいる街の周辺のマンションは全て同じ会社のセキュリティシステムを使っているのだが）、そして何らかの形でそのシステムが切られ手いたことなどがわかった。

\*

「ふあああ…」

ある日の休み時間。信幸が大きくあくびをした。

「どうしたの、鶴田くん」

唯が話しかけた。

「あ？ いや、なんでもない」

「なんでもない、って…、ノブ君、最近やたら授業中でもあくびしてるじゃないの？」

涼子も心配そうに聞く。

「あ、いや。あれから、あちこち見張ってるんだよ」

「見張り？」

「ああ。12時頃まで毎日双眼鏡で見回ってたけど。でもこれといった収穫はなし」

「まあ、大変ですねえ」

みこが言う。

「大変、ってみこちゃん。心配するところが違うよ」

圭亮が言う。

「…それで寝不足、ってわけですか。でも、最近は警察も見回りを強化してるでしょう？ そう簡単に相手も尻尾を出すとは思えませんがねえ…」

和美が言う。

「…でもまだ捕まっていない以上、また何かやるかもしれないだろう？」

\*

それから2、3日過ぎたある日のことだった。

夜11時を少し過ぎたときだった。

「あ…」

自分の部屋の窓から双眼鏡で外を眺めていた信幸が声を上げた。そう、双眼鏡の向こうでなにやら怪しい人影が歩いていたのだ。よく見るとある一軒のマンションの方に向かっていた。

「…あそこは、まだ被害に遭ってなかったよな…」

もしかしてその人影の目的はそのマンションなのだろうか？

信幸はそつと下へと降りる。

家族は既に寝てしまっているようで物音ひとつ聞こえない。  
信幸はそつとドアを開けると、外に出て、静かにドアを閉めた。

\*

そのマンションに近い曲がり角。

信幸はさつきからじつと中の様子を伺っていた。

…と、不意に信幸の肩を誰かが叩いた。

信幸はそれを払いのけるが再び信行の肩を叩く。

「…っせえな。誰だよ…！」

目の前に立っている人物に思わず絶句する信幸。

ナントそこには圭亮が立っていたのだ。

「圭亮！」

「オレだけじゃないぜ」

そう言う圭亮の後には和美たち4人も一緒にいたのだ。

「…お、おまえ達なんでこんなところに…」

「おまえ一人だけだと心配だからな。和美から連絡があって急いでみんな集めた、って訳だよ」

「和美が…」

「やっぱり心配だったからね。実はボクも見張りをしていたんだ。

ボクのマンションからは見晴らしもいいしね」

「…そうか…」

「…それで、どうなってるんだ？」

「ああ。何も動きはねえよ」

「逃げたんじゃねえのか？」

「それはねえよ。それらしい人物が出た形跡はないしな」

その時だった。

「…誰か出てきたぞ！」

圭亮が言う。見ると、マンションの中から何者かが出てきたのだ。  
信幸は片手に持っていた懐中電灯をその人物に向けて照らした。

「…！」

明かりの先には30代後半〜40代に思える男が立っていた。よくみると片手に鞆を持っている。

「…な、何だ、おまえら？ 何でこんな時間に子供が外にいるんだ！」

「そういうおじさんこそ、こんな時間に何してたんだよ？」

「何だっつていいだろう？」

「…じゃあ、その鞆の中、見せてもらっていいですか？」

「なんだと。」

「知ってるでしょう？ 最近このへんのマンションが何者かによって荒らされているのを。こんな時間にこんなところにいたら、誰だっつて疑うでしょう？」

「…！」

「…どうしたの？ 見せられないの？」

「…！」

すると男はなにやらゴソゴソと鞆の中を探るといきなりナイフを取り出した。

「え…！」

そしてナイフを片手に6人迫ってくる。

それを見た6人は思わず後ずさりをする。

いくら6人いると知ってもこちらは小学生、相手は大の大人である。

このままでは6人とも大変な目に遭ってしまう。

そのときだった。

「ぐわっ！」

男が変な声を上げ、手にしていたナイフが弾け飛び、道端に転がった。

男が倒れた表紙に手にしていた鞆が転がり落ち、中から装飾具や財布が出てきた。

やっぱりこの男がマンション荒らしだったようだ。  
そして男の傍らにはサッカーボールが転がっている。

「これは……」

見ると男の向こう側に自分達のクラスの担任である須崎が立っていた。

「……先生！」

「く……この野郎！」

そういうと男は須崎に襲いかかった。

しかし須崎は軽快なフットワークで男をかわすと、サッカーボールを足で拾い上げ、軽く浮かすと、右足で思い切り蹴り上げた。

今度は丁度振り向いた男の顔面にヒットすると、男がひっくり返ってしまった。

須崎は男を取り押さえると、

「早く、警察に連絡するんだ！」

「は、はい！」

\*

そして連絡を受けた警察が到着し、男の身柄を拘束すると、パトカーに載せて連行して行った。

須崎は大きく溜息をひとつ吐くと、

「……全くお前たちも……。先生があの場合にいなればどうなっていたかわからないのか？」

「……すみません……」

6人はただ謝るだけだった。

「……まあ、とにかく色々と話したいことはあるんだけどな。ここではなんだから、詳しいことは別のところで聞こうか」

(エピソードへ続く)

## エピソード

6人が須崎に連れてこられたのはあるアパートだった。

「ここは？」

「ああ、先生はここに住んでるんだ」

そして須崎に階段を上がっていくのに6人がついていく。

\*

須崎がドアを開け、ドアの傍にあった電気のスイッチを入れると、

「ほら、入れ」

そして6人が中に入った。

20代半ばの男一人暮らしの部屋、と言うのはこんなものかどう  
かよくはわからないが、色々なものがあちらこちらにおいてある部  
屋だった。

ただ、不思議なことに本棚はスポーツ関係の本が一杯置いてあり、  
中でもサッカー関係の本が多いように思えた。

\*

「何もないけどな」

そう言いながら須崎はコップを7個と清涼飲料水が入ったペット  
ボトルを6人が座っているテーブルの上に置いた。

暫くの間沈黙が流れる。やがて、

「でも、先生。何でオレ達のいる所がわかったんですか？」

信幸が聞くと、

「ん？ おまえの親から連絡があったんだよ」

「え？」

思わず絶句する信幸。こっそりと家を出たつもりだったの知って  
いた、と言うことだろうか？

「これから寝ようか、と思ってた時におまえの親から電話があつて  
な。『息子がいなくなったので探して欲しい』って連絡があつたん

だよ。念のために圭亮や早乙女たちの家にも電話してみたら、この家でも息子や娘がいなくなってた、っていうじゃないか」

「……」

「これは一大事だと思ってな。あちらこちら探してたら、あのマンションにおまえ達がいた、とこういうわけだ」

「……そうだったんですか……」

「……それにしてもおまえらも……、あんな夜中に子供だけで集団で出歩くなんて、常識じゃ考えられないな。ああいうこともあるかと思つてサッカーボールを持っていったのはよかつたな」

「……」

6人は何もいえなかった。確かにそうであろう、どう考えたって正しいのは担任である須崎のほうだし、自分達だって一歩間違えれば危なかつたのだから。

「……マンション荒らしに関しては先生も話は聞いてたし、どうなるかとは思っていたけど、まさかおまえ達が調べていたとはな」

「……」

「……まあ、でもおまえ達のことだ。これで懲りとも思えないけどな。また何か事件があつたら首を突っ込みそんな気がするんだが。」

「……そうだろう？」

「……」

6人は何も言わなかった。

「……何も言わない、って事はそうだ、っていうことだな。……よし、だったらこうしよう。これから先生がおまえ達の監督になる、ってのはどうだ？」

「……監督？」

思わず素っ頓狂な声を上げる信幸。

「……そうだ。ほら、野球だつてサッカーだつてチームスポーツには監督がいるだろ？ それと一緒に。これからは何か調べたい事や気になることがあつたら、どんな小さなことでもいいから監督である先生に相談しろ。そして先生の言う事を必ず聞くこと！ その代わり、

おまえ達に何かあったら先生が責任を取るから心配はするな。それでどうだ？」

「…じゃあ…」

圭亮が聞くと須崎は何も言わずに頷いた。

それはこれからもこういう事をやっていい、と言う須崎の意思表示だった。

\*

「…まあ、とにかく、先生が責任もって送ってやるから今日はもう帰れ」

さすがにもう1時近い真夜中では小学生が夜道を歩くにはいくらなんでも危険である。

6人は須崎の言う事に従うと、立ち上がって玄関に向かっていった。

そのときだった。何かを思い出したかのように圭亮が、

「…ねえ、先生。ひとつ聞いていいですか？」

「…ん？ なんだ？」

「先生、もしかして須崎雅彦選手でしょ？」

「え？」

「…だって、これ見てよ」

そう言うと圭亮はポケットから財布を取り出すと、その中から一枚のカードを引っ張り出した。

「…これは…？」

それを見たほかの5人が思わず絶句する。

そこにはおそらく試合中の様子を撮ったのであろう、「リーグのチームのユニフォームを着て、ピッチに立っている須崎の姿があった。

「…先生の顔見たとき、何処かで見たことあるな、と思ってたんだけど。やっぱりそうだったんだ」

「…なんで、こんなの持ってたんだ？」

「…ほら、こういったカードがおまけに付いているスナック、つてあるだろ？」

「…ああ、覚えてるよ。オレもしょっちゅうおまえが買ったスナック食わされてたな」

信幸が言う。

「オレ、このチームのファンだったからさ、どうしてもこのクラブの選手のカードが欲しくて、一杯買ったんだけど、ようやく当たったのがこれだったんだよな。それでさ、今でも大事にとっておいてたんだ」

「先生、それって本当なんですか？」

唯が聞く。

「…よくわかったな。1年だけだけどな、先生は元Jリーガーだったんだ」

「本当？」

「…でもなんで先生なんか…？」

「…実はな、先生は小さい頃からサッカーが好きだったんだ。で、高校もサッカーが強かった高校に入って、全国大会にも出場したことがあるんだ。それで、その、圭亮が好きだ、つて言うクラブに入団して、公式戦にも何回か出たことがあるんだ」

「…でも、どうして辞めたんですか？」

「辞めた、つて言うよりも辞めさせられたんだな。結局は先生からのレベルのヤツなんか何人もいたし、それ以上のレベルのヤツもそのくらいいたからな。どのスポーツでもそうだけど、10人が入団すれば、その分10人が辞める事になるんだ。他のクラブからも誘いがなかったし、じゃあ大学に入りなおそう、つてことで大学に入つて、教員免許を取ったんだ。…それにしても、よくわかったな」

「いや、須崎雅彦、と言う名前を顔を見たときもしかしたら、と思つて。そしてさっきの身のこなしを見て、やっぱりな、つて思ったんだ」

結局、その後は6人は須崎の運転する車にすし詰めになりながら各々の家に帰り、行く先々で須崎が頭を下げるはめになってしまったのは言うまでもない。

\*

それから数日たって、信幸たちが捕まえた男はやはりここ最近のマンション荒らしだということがわかった。

更に調べてみると意外な事実がわかった。

なんとその男は以前、その盗みに入られたマンションが利用していたセキュリティシステムの会社に勤めていた、と言うことだったのだ。

数年前に会社を辞めて以来、生活に困りマンション荒らしをしていらした。

確かに元社員だったらセキュリティシステムの仕組みもわかることだろうし、その外し方などもわかっていただろうが…。

マンション荒らしを捕まえた、という事で信幸たち6人はたちまちの内に有名人となってしまった。

そして、このときから「九十九里少年探偵団」と呼ばれることになる6人の活躍が始まったのである。

(おわり)

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9192a/>

---

九十九里少年探偵団シリーズ「結成！ 少年探偵団」

2008年8月29日19時34分発行